令　和　6　年　度

試　験　問　題

小 論 文 試 験

（9時30分 ～ 11時30分）

【注　意】

1. **試験開始の合図があるまで，この問題冊子の中をみてはならない.**
2. 監督者の指示に従って，**すべての解答用紙の受験番号欄**に**受験番号**を記入せよ.
3. 問題冊子は表紙のほか4ページ，解答用紙は2枚，下書き用紙2枚である.
4. 問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は，手を挙げて監督者に知らせよ.
5. 解答用紙は切り離してはならない.
6. 解答用紙は持ち帰ってはならない．問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってよい.

—余　白—

（このページに問題はありません）

【1】 医師である筆者が平成元年当時に記した次の文章を読んで、医師に求められる人間的力量について考えるところを八〇〇字以内で述べよ（句読点も一字と数える）。

私は医学生の時に、一年間結核性肋膜炎で臥床し、また昭和四十五年には、北朝鮮脱出を試みた赤軍によりハイジャックされた「よど号」機で死の危機にさらされた経験の持ち主である。長期の病の経験やいのちの不安体験は、私が臨床医として、患者をケアし、臨死患者やその家族に接する私のアプローチを導いてくれる大切な指針となった。しかし、そのような私自身の体験から生み出されたことのほかに、私には、私の古き友人の病気への挑戦と彼らの遺した言葉が、医師としての私の生き方に大きな導き手となっている。

失った親しい友人の一人は、十年余り私より若い基礎医学者細川宏君である。彼の遺した言葉は、年月の経過にもかかわらず、私の生涯にわたって私とともにあり、私に医師としての活動の指針を示してくれたものである。

細川宏君は大正十一年生まれで、東京大学医学部卒業後は解剖学教室で脳の研究に没頭した。彼は四十歳の若さで解剖学教授となったが、胃ガンのために四十四歳でこの世を去った。彼は一年近い大学病院での闘病中に数多くの詩を遺して死んでいった。彼の遺稿の詩は「病者・花」と題して出版された。私は、名ある詩人でも、病む者の心を彼のようにリアルに表現した詩は少ないと思う。これは考えられた言葉ではなく、体の芯から出た言葉である。その冒頭の詩は「病者（ペイシェント）」と題され、「病者とは耐え忍ぶ者の謂（いい）である」という副題が添えられている。

病者は　辛抱づよく　耐え忍んでいる
何に耐え　何を忍ぶというのか
その身を襲う病苦の　激しくかつ執拗な攻撃を
じっと耐え忍ぶのだ

これは長編の詩の冒頭の言葉である。病との闘いを彼はこう語った。

敵(病気のこと)を反撃すべき一握りの武器もなく
全身を敵の攻撃にさらしつつ　ただ一基のベッドに身を伏せて
ひたすら時の経過を待つのだ

彼の胃ガンが発見された時は、病気はすでに進行しており、胃切除手術後もガンは進行した。ガンという病名告知を彼は受けなかったが、彼のこの「病者・花」の詩の途中には、次のような一節がある。

もしかりに僕が　俺はもうすぐ死ぬんだぞと　会う人ごとに言ったとしてみてごらんなさい　当人の気持ちは無理からぬとしても　返答に窮して困惑するのは　そういうのっぴきならぬことを告げられた人達つまり僕の親しい周囲の人々に他ならないでしょう　そんな身勝手を僕のささやかなプライドがどうしても己に許す気にはならなかったのです

彼は告げられなかったガンを自分で感知した。

一九八〇年代の英米では、ガンの告知は、その患者の九割になされている。日本では、早期ガンを除いては、一割以下であろう。しかし、真実を告げることの倫理性が尊重されれば、今後日本も、長い歳月のうちには、病名告知の方向に進む可能性が大きい。しかし、「告知後の毎日をどうその患者と対決していくつもりか、それだけの人間的力量をはたして医師に期待してよいものか」という彼の詩の中での反問は、私の心の芯に刃物のように刺さった。人間的力量とはなにか。告知した後の主治医には、からだと心に十字架のように重い負担を背負う覚悟と、それを実践させる現実の行動力の用意があるか。遺された彼の言葉は、私が患者へ「病名告知」を決心する時、シンフォニーのメロディーの底に流れるコントラバスのように、私の心の芯に強く響くのである。

日野原重明「いのちの器」一九二―一九四頁　主婦の友社(一九八九年)より
抜粋

【2】

法医解剖は、犯罪性がある死体・犯罪性が疑われる死体・身元不明死体・外表検査では死因がわからない死体、などを対象とし、それらの死因を解明するために行われる。奈良県ではすべての法医解剖が本学でなされている。

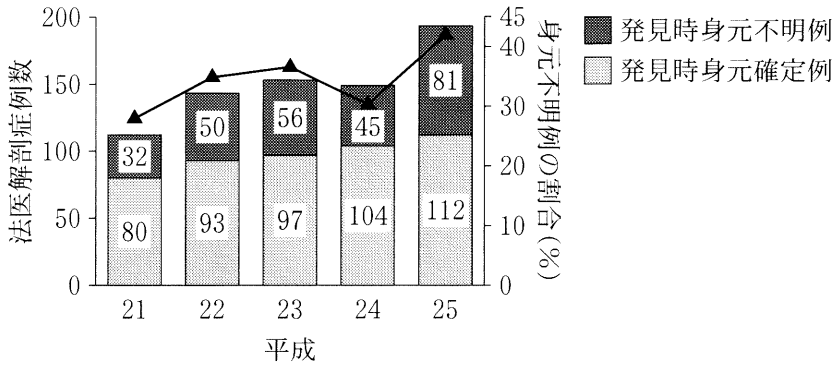
グラフ1は、奈良県内における平成21年から平成25年までの法医解剖症例の年次推移(棒グラフで表示)、ならびに腐敗・白骨化・焼損などのために発見時には身元不明死体として法医解剖に付された遺体の割合(折れ線グラフで表示)を示している。

グラフ2は、それら身元不明死体の発見場所を示している。

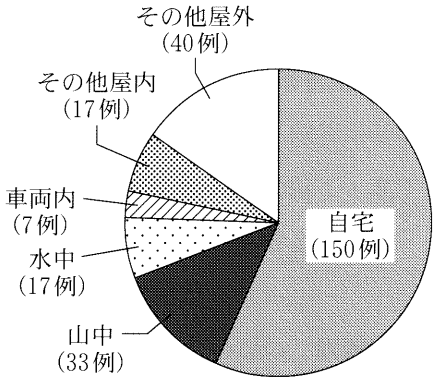
グラフ3は、その後の調査および検査によって判明した死因の内訳を示している。グラフ中の「内因」とは、虚血性心疾患や脳内出血などの内因性疾患による死亡を、一方「外因」とは内因性疾患以外の事故や自殺などによる死亡を、意味している。なお、焼死の事例(一酸化炭素中毒に起因する死亡を含む)は、このグラフには含まれていない。

グラフ1の年次推移は、身元不明事例が増加する傾向にあることを示している。その社会的背景と、これを減少させるための社会的対策を、グラフ2および3を参考にして800字以内で論ぜよ。

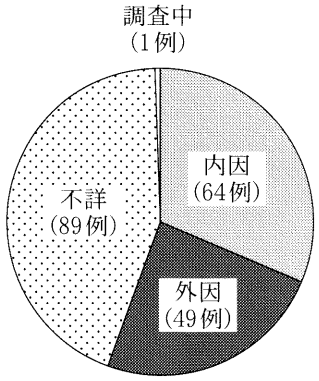
(出典：奈良医学雑誌、2014年)



グラフ１．法医解剖症例数と身元不明症例の年次推移



グラフ２．身元不明死体の発見場所



グラフ３．身元不明死体の死因の内訳